

英語話者と日本語話者の時間把握についての一考察
An analysis of the temporal construal on English and
Japanese speakers

藤原正道
Fujiwara Masamichi

Abstract

The aim of this paper is to clarify the differences of the temporal construal between English speakers and Japanese ones through the framework of cognitive linguistics.

My analysis is based on the subjective and the objective construal in Ikegami (2011). The former means that a speaker recognizes an event from the point of view that is outside of the event. The latter means that a speaker recognizes an event as if there were both of the speaker and the hearer in the same place where the event occurred and they viewed the event from the inside of it.

I apply these ideas to the analysis of the temporal expressions in Japanese and English and discuss that *-ru* in Japanese does not perfectly correspond to the present tense in English nor *-ta* does not do to the past tense.

Unlike the English speaker, the Japanese one does not consider the speech time as the only one criterial time. The temporal criterion continuously changes and is relative for the Japanese speaker. S/he always speaks of an event as if s/he shared the same place and time with her or his hearer and both of them existed together at the place which and at the time when the event occurred. Kato (2007) calls this Japanese feature “NOW & HERE”. The time when the Japanese speaker recognizes the event is NOW while the place where s/he does is HERE.

Thus, *-ru* in Japanese represents the time and after the time which the Japanese speaker recognizes the event while *-ta* does the time before which s/he recognizes the event.

I examine the difference between the English and the Japanese temporal

structure through the analysis of the historical present. In one paragraph, there are few alternations between the past and the present tense in English. Almost every sentences is in the present tense. On the other hand, we can find a lot of exchanges between *-ru* and *-ta* in one Japanese paragraph. I clarify that the English and the Japanese speaker recognized the time from a different point of view and has different temporal system and criteria.

1. はじめに

本論の目的は、池上（2011）の提案する主観的事態把握と客観的事態把握が日本語と英語の時間把握にも反映され、従来の英語中心の時制やアスペクトの概念では、日本語の時間表現を十分に分析、説明できないことを明らかにする。

日本語話者の時間把握には、聞き手との間に心理的な「イマ・ココ」という共有感覚が存在し、その認知が日本語話者の時間把握にも影響しており、英語とは異なった時間関係を示すことを分析する。

2. 英語と日本語の事態把握

英語の発話者にとって主語、目的語は必須の文法的単位である。Langacker（2008）や池上（2011）が述べているように、英語話者はそれぞれの文法上の役割として客体化し、発話者が別の視点から眺めるような事態把握の仕方をする。次の例を見てみよう。

- (1) a Where am I?
b ここはどこですか？

(1a)の例は、道に迷い話し手がどこにいるのかわからない事象を表している。発話者である自分 = 'I' をその場から切り離し、事態の外側から眺めることによって、自分 = 'I' の置かれた事態を聞き手に解説しているかのようである。英語話者は、このように事態を客観的に把握している。

一方、日本語話者の事態把握はどうだろう。上記(1b)のように日本語では、発話者と聞き手が同一空間にいることを表す「ここ」を用いて、聞き手と一緒にいるイマ・ココの場所の情報を聞き出そうとしている。英語と違い、話し手が聞き手とともに事態を内側から一緒になって見ているので、事態現場において当然である発話者の「私」や聞き手である「あなた」も明示されていない。さらに次の例も見てみよう。

- (2) a The train came out of the long tunnel into the snow country.
b 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

『雪国』の冒頭(2b)とその英語訳(2a)は、日本語と英語の発送の違いを示すために、よく用いられてきた。(2b)では、行動主体の主語が明らかにされていない。(2a)の英語版のように話し手自身が脱現場化してしまう言語では、事態を事態の外側から眺めることになり、*the train* という主語が必要になる。

しかし、日本語には主語は必要ない。話し手と聞き手が一緒に事態内部に潜り込み、主観的に事態を把握する日本語話者は、列車の中から外のトンネル内部の真っ暗な風景を眺め、次に真っ白な雪の風景が視界に広がるというコントラストを楽しむことができる。

このように日本語話者は、聞き手を巻き込み、しかも同一状況にあるという共有感覚、つまり事態の中に入り込んだ視点で、事態を認知している¹。

3 時間把握

3.1 英語の時間把握

英語話者も日本語話者も目に見えない時間を認知するために、空間の比喩を用いる。英語では話し手の前方に未来があり、後方に過去が存在している。前後という比喩が多いことから、時間を直線的に捉え、発話時 = NOW を中心にそれ以前は過去、以後は未来というように直線的に時間領域が区別される。次の(3)のように英語話者の前方が未来を表し、反対方向の後ろが過去となる。

- (3) a I must study English harder over the year *ahead*.
b All our worries are *behind* us now.
c We discussed about the matter *after/before* supper.

加えて、2章で述べたように英語話者は、事態を外側の視点から眺めることで事態を把握する。このことは時間の把握にも反映されている。英語話者は、事態が生じる時間を外側から客観的に眺めることができるので、事態が発話時に対して時間軸のどの位置にあるのか確認しながら言語化する。

¹ 日本人の聞き手がよくうなずくのも、話に参加し、話を聞いていますよという合図。必ずしも内容に同意しているわけではない。

- (4) a I thought I could finish the work by dinner.
 b She must have forgotten her promise.

(4a)のように主節 *I thought* の時間が過去なら、発話時間を基準に後ろに位置する基準時を設定し、その基準を軸にして従属節も主節に従って時制を一致させ、過去にする。

また、(4b)のように発話者が事態の判断をしているのは発話時だが、問題の事態 *forget her promise* は発話時を表す文法的マーカーの *< have -en >* を用いて、判断している時間より以前の時間であることを示している。

3.2 日本語の時間把握

日本語話者は「ル」「タ」を用いて問題の事態の生じる時間を示すが、「ル」が英語の現在（または未来）を表し、「タ」が過去を表すというような単純な対応はしない。次の例を見てみよう。

- (5) a When she comes here tomorrow, I will tell her about it.
 b I lived in Berkeley before I came to Japan.
 (6) a 彼女が明日来たら、打ち明ける（つもりだ）。
 b 日本に来る前、バークレーに住んでいた。

(5)のように英語の場合は、発話時を基準にして直線的にその前が過去、後が未来というように1つの時間を基準にする絶対時制である。しかしながら、日本語の例の(6 a)の「来たら」は明日起こる事態なので、「タ」は過去を表していない。また(6b)の「来る」は、「バークレーに住んでいた」という事態よりさらに昔のことなので、「ル」は現在のことを表していない。

(6)の文を無理矢理に時制を一致させてみると、次の(6')のように日本語として不自然であったり、理解できなくなる。

- (6') a ??彼女が明日来るとき、打ち明ける。
 b *日本に来た前、バークレーに住んでいた。

このように「ル」「タ」は、英語の時制に一致していない。

「ル」「タ」は樋口(2000)が提案しているように、発話者が事態を認識した時間を基準にして、「ル」はそれ以後の時間をあらわし、「タ」はそれより以前の時間を表す

という文法的機能を有しているようである。

加えて本論では、イマ・ココという話し手と聞き手との時間の共有感覚の重要性も提案する。

池上 (2011) が示しているように、日本語話者は英語話者と異なり、事態を聞き手と共に主観的に把握する。さらに時間に関しては、加藤 (2007) が示すようにイマ・ココという聞き手と共有する現在が常に基準となっている。その時間を基準にしてそれより以前が「タ」、それ以外が「ル」を用いて表す。

さらに重要なのは、話し手だけでなく、聞き手もそこに存在していることである²。特に日本語の場合は、常に聞き手が時間の基準を意識する必要がある。

例えば、上記の(6)では当然のように発話者は主語として明示されておらず、話し手と聞き手がイマ・ココに共に存在しているような発言となっている。

(6a)では、時間把握も発話者の<打ち明ける>というこれからの事態を基準に、それよりも以前の<彼女が来る>という事態を把握している。聞き手も話し手中心の時間基準に付き合っ、時間を把握しなければならない。そうでなければ、<打ち明ける>のも<彼女が来る>のも発話時からは先の事態であり、両事態とも「ル」で表現されるはずである。

(6b)では、<住んでいる>が発話時より以前の事態の時間、つまり過去なので「タ」で表されるが、<日本に来る>は、その時点を基準にしているわけではない。<日本に来る>は、発話者が問題の事態は生じる時間を聞き手と共にイマ・ココと認識しているので、「ル」で表される。(6'b)のように「タ」では、日本語話者は容認できない。

英語のように発話時という1つの絶対的基準を基に時間関係が表現されるのではなく、日本語では、相対的な時間基準で事態を表現するため、聞き手も話し手と共いどの時間がイマなのかを判断しながら会話する必要がある。

さらに、日本語話者が時間把握においても聞き手と共有意識であるイマ・ココの感覚を有している証拠は、歴史的現在 (Historical Present : 以下 HP) にも表れている。次の(7)を(8)を見てみよう。

(7) Mark cornered me at his party.

“Well, Ray,” he said, “I’ve decided to make you …” He waved his hand vaguely behind him, where Bluestein lurked like a funeral director at a christening.

My brother-in-law *has* always looked to me like the villain from a nineteenth-century melodrama. He *is* tall, slim, but solid, with hawkish features. His dark-

² 現実に存在している必要はない。発話者ではなく、聞き手が話し手の時間的基準を常に意識することが必要となる。

red hair, in spite of being carefully styled, *slips* down over his forehead, requiring him to flip his head every ten seconds or so, like a bull testing the air for odors of sex. Today he *wears* a tight, tailored sports jacket that *looks* as if it has been skinned off a long-haired, cinnamon-colored monkey. He *wears* a green tie, thoroughly knotted. His hands *are* immaculate, his ring finger featuring an emerald that if sold might get me out of debt. ... (Shoeless Joe: 61)

- (8) a 雲突く真っ黒な大坊主としてキンケイドを脅していた暴君、無慈悲で残忍な圧制者たるハンクは、そのこけおどしの權威を喪失し、みすばらしいちっぽけな正体を露呈した。そのハンクが小さな子供と化して逃げ去っていく。

恐ろしい暗雲が消え薄れ、キンケイドの心が透明化した。もはや二度と幼い日から無限に繰り返された凶夢が、己を捉えることがないとわかった。

(『タイガーウーマン』: 179-180)

- b 間断ない雷鳴と豪雨の轟きに圍繞されて、絶対に聞き取れないはずのない微かな物音をキンケイドは聞き取った。突如、全感覚が奇妙に透徹する。それは雷光の閃きが暗黒の裡にわだかまるものの全貌を、一瞬だけ隈無く照射してのけ、透視することを許すのに似ていた。(『タイガーウーマン』: 181)

上記(7)のように英語の HP は、頻繁に過去形と現在形が交代しない³。段落が HP のまとまりであるかのようなのである。しかしながら、(8)の日本語では「ル」と「タ」が1つの段落内でもよく入れ替わる。

藤原(2012)で示したように、HP では話し手と聞き手が問題の事態が生じる時間で共有の心理的空間=時間を占めると考えられる。

英語の場合は、話し手は発話時から離れて事態が生じる時間へと聞き手を連れて行く。しかし、発話時が基準であるのは変わらない。一方、日本語の場合は、発話者が聞き手と共有のイマ・ココの時間認知感覚をもっているため、問題の事態を認識した時間と場所がイマ・ココとなる。日本語話者は、絶対的な唯一の時間の基準を持つ必要がない。

さらに「タ」「ル」は、発話者が事態を自分の後ろにあると見ているのか、後ろにあると見ているのかというマーカーの機能にすぎないとすれば、聞き手との共有感覚のある発話者は、過去と現在を自由に行き来しても時間の把握に問題が生じない。したがって、(8)のように「ル」と「タ」が頻繁に入れ替わっても、聞き手(または読者)との間に時間的理解に混乱が生じることはない。

³ Wolfson (1982) を参照。

4. まとめ

時間の認知の仕方にも英語と日本語で違いがあり、英語話者は客観的事態把握の影響から、時間も事態の外側から見ており、そのことが時制の文法形式に表れている。一方で、日本語話者は主観的事態把握を時間にも用いて、聞き手と時間も共有し、問題の事態を「イマ・ココ」からの視点で表現することを議論してきた。

従来の形式にのみに偏った文法ではなく、人間に認知能力に基づいた意味や、実際のコミュニケーションの空間を想定した聞き手の存在を意識するなど、認知意味論や語用論の研究成果を取り入れるのも外国語教育にとって有効であろう。

また一つの言語の文法的視点を別の言語に無理矢理当てはめるのではなく、それぞれにとって自然な文や発話に表れる規則を分析できる理論と、それを可能な限り簡単に説明し、例示できることが外国語教育に求められている。

その第一歩として、日本語話者および英語話者の時間把握の違いを十分理解することが、今後の外国語教育におおいに役立と私は確信している。

参考文献

- Evans, Vyvyan (2003) *The Structure of Time: Language, meaning and temporal cognition*, John Benjamins Publishing Company.
- 藤沢伸介 (2011) 『言語力：認知と意味の心理学』新曜社。
- Fujiwara, Masamichi (1995) “On the Temporal Structure of Historical Present,” 『筑波英語教育』16号、83-96.
- 藤原正道 (1999) 「時間の進行と日本語と英語の歴史的現在について」『実践女子大学文学部紀要』第41集、61-72.
- 藤原正道 (2000) 「英語の丁寧さと時制と相の多義性の関係」『実践女子短期大学評論』第21号、14-24.
- 藤原正道 (2004) 「When 節と物語の時間の進行について」『実践女子短期大学紀要』第25号、7-18.
- 藤原正道 (2006) 「英語の進行形の意味の拡張について」『言葉の絆：藤原保明博士還暦記念論文集』326-335.
- 藤原正道 (2007a) 「歴史的現在中の when 節と物語の時間の進行」『ことばと文法と：鈴木英一教授還暦記念論文集』219-230.
- 藤原正道 (2007b) 「歴史的現在中の「とき」節と「と」節について」『実践短期大学紀要』28号、15-23.
- 藤原正道 (2012) 「英語と日本語の物語の進行と時間の認知に対する一考察」『実践短

期大学紀要』33号、1-12.

浜田寿美男 (1999) 『「私」とは何か：ことばと身体の出会』講談社選書メチエ.

樋口真理子 (2000) 「ル・タ・テイルの意味機能試論：認知文法の見地から」『九州工業大学情報工学部紀要』第13号人文・社会学編1-40.

樋口真理子 (2001) 「日本語の時制表現と事態認知視点」『九州工業大学情報工学部紀要』第14号人文・社会学編53-81.

樋口真理子 (2006) 「「語り」の現在形」『九州工業大学情報工学部紀要』第19号人文・社会学編9-50.

池上嘉彦&守屋三千代 (編著) (2009) 『自然な日本語を教えるために：認知言語学をふまえて』ひつじ書房.

池上嘉彦 (2011) 「日本語と主観性・主体性」澤田治美 (編) (2011) 『主観性と主体性』49-67.

井出祥子 (2006) 『わきまへの語用論』大修館.

加藤周一 (2007) 『日本文化における時間と空間』岩波書店.

木村 敏 (1982) 『時間と自己』中公新書.

子安増生&大平英樹 (編) (2011) 『ミラーミューロンと「心の理論」』新曜社.

子安増生&白井利明 (編) (2011) 『時間と人間』新曜社.

Lakoff, George & Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*, The Univ. of Chicago Press (渡部昇一他 (訳) 『レトリックと人生』大修館書店).

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*, Oxford Univ. Press.

益岡隆志 (2009) 「日本語の尊敬構文と日・外の視点」坪本篤朗他 (編) (2009) 『「内」と「外」の言語学』3-22.

明和政子 (2006) 『心が芽生えるとき：コミュニケーションの誕生と進化』NTT 出版.

澤田治美 (編) (2011) 『主観性と主体性』ひつじ書房.

坪本篤朗他 (編) (2009) 『「内」と「外」の言語学』研究社.

Tomasello, Michael (1999) *The Cultural Origins of Human Cognition*, Harvard Univ. Press. (大堀嘉夫他 (訳) 『心とことばの起源を探る：文化と認知』勁草書房).

Wolfson, Nessa (1982) *CHP: The Conversational Historical Present*, Foris.

引用文献

平井和正 (1986) 『タイガーウーマン』講談社.

Kinsella, W.P. (1983) *Shoeless Joe*, Ballantine Books.